治承六年五月卅日

〔神皇正統記 後醍醐〕頼朝の時〇略中また直實といひけるものに、一所をあたへたまふ下文に、日本一の甲の者なりと書てたまはりけり、一とせかの下文をもちて奏聞する人のありけるに、褒美の詞のはなはだしさに、あたへたるところのすくなさ、まことに名をおもくして、利をかろくしける、いみじきことと、口々にほめあへりける、

〔吾妻鏡 四〕元暦二年〇文治元年八月廿四日甲戌、下河邊庄司行平蒙歸參御免、自鎮西去夜參著、是相副參州、發向西海、竭軍忠訖、同時所被遣之御家人等、不堪經廻、而多以歸參、行平于今在國、有御感云云、今日參營中、獻盃酒、二品出御、武州北條殿以下群參、行平稱九國第一進弓一張之處、〇略中仰曰、行平日本無雙弓取也、見知宜弓之條、不可過汝之眼、然者可爲重寶者、則召廣澤三郎令張之、自引試給、殊相叶御意之由被仰、直賜御盃於行平、

〔吾妻鏡 九〕文治五年七月廿五日癸未、二品〇源頼朝著御于下野國古多橋驛、〇略中入御御宿、于時小山下野大丞政光入道獻駄餉、此間著紺直垂上下者、候御前、而政光何者哉之由尋申之、仰曰、彼者本朝無雙勇士熊谷小次郎直家也云云、政光申云、何事無雙號候哉云云、仰云、平氏追討之間、於一谷已下戰場、父子相並、欲棄命及度々之故也云云、政光頗笑、爲君棄命之條、勇士之所爲也、爭限直家哉、但如此輩者、依無頤服之郎從、直勵勳功、揚其號歟、如政光者、只遣郎從等、抽志許也、所詮於今度者、自遂合戰、可蒙無雙之御旨之由、下知于子息朝政、宗政、朝光、幷猶子頼綱等、二品入興給云云、

〔先哲叢談 後編 四〕管麟嶼

物徂徠稱麟嶼、爲千里駒、以奬譽之、室鳩巣固以徂徠之徒爲異學、常排擯之、而以麟嶼稱爲天下第一之才子、

〔先哲叢談 八〕奥田士亨字嘉甫、小字宗四郎、號蘭汀、又號南山、又號三角亭、伊勢人仕津侯、